

話題作『1868 明治が始まった年への旅』の著者

加来耕三氏に聞く「明治維新」(下)

1868年という激動の一年間を多面的、複合的に描いた話題作の著者に聞く明治維新の本質。維新はいつから始まり、その目的は何だったのか。150年経つたいま、何を学ぶべきなのか。加来氏の主張は実に示唆に富んでいる。

(インタビュー・構成 ジャーナリスト 山田 稔)

— 今年には明治維新150年ですが、そもそも明治維新のスタートとなった転換期は、どこにあったのでしょうか？

加来 よく「明治維新は革命なのか改革なのか」と聞かれますが、改革を積み重ねた結果が、明治維新です。多くの日本人が気づいていないのが、維新のスタート時点です。ひとつの説はペリー来航（嘉永6年（1853））。当時の日本の千石船（約150トン積 ※米1石＝150kg）の20倍もの黒船4隻（最大の軍艦は「サスケハナ」）で来航したのですが、幕府はその前にオランダから提供された「オランダ風説書^{ふうせつがき}」によって、来航目的からペリーの経歴まで知らされてきました。ところが、この段階では危機感を抱くことはなかった。それが、ペリー一行が帰るときに、品川沖を通りかかり、ペクサン砲（炸裂弾）をはじめとする最新兵器搭載の艦隊に威圧されて、日本側はパニックに陥ってし

まいます。ペクサン砲の直撃を受けたら、江戸城の本丸が射程距離となり、江戸中が火の海になることに気付いたからです。この衝撃が、明治維新につながっていったという説です。

明治維新の原点はアヘン戦争にあり

— 危機が迫りつつあることを知らされていないが、何の対応もできていなかったわけですね。

加来 当時は台場も建設途中で、ペリー来航に備え三浦半島の防衛を、多少、強化したぐらいでした。維新のスタートという意味では、ペリー来航13年前のアヘン戦争（1840年～42年）が大きなターニングポイントだったので、多くの日本人はこのことをいまだに知りません。当時の清国は人口3億5000万人で、軍隊は88万人の兵力を擁していました。これに対



して英国は人口1500万人で、アヘン戦争に投入した兵力は延べでも2万人です。戦力の差は圧倒的だったにもかかわらず、清国は破れてしまう。なぜか。封建制そのものに問題があったからです。広大な清国は省単位で統治を行っていたため、たとえば天津が危機に陥っても他省は応援部隊を繰り出さない。そうした封建制の弊害が、敗戦を招いたのです。

――構図は当時の日本もそっくりですね。

加来 幕藩体制下では、藩が国です。日本人という概念はなかった。いるのは江戸人であり、薩摩人、会津人なのです。だから薩英戦争でも戦ったのは薩摩藩だけ。アヘン戦争で清国が敗れた原因が封建制にあることを、薩摩藩主の島津斉彬や、越前福井藩主の松平春嶽らは理解していました。このままでは欧米列強の植民地にされてしまう、という危機感を持ったのです。それを避けるためには封建制ではだめだ、中央集権化を達成して日本人という国民をつくり、国民一人一人が国を守るという意識を持たなければならぬ。そう思い至ったのです。ここが明治維新の原点といえるのではないのでしょうか。

――ところが、事態はすぐには動きませんでした。

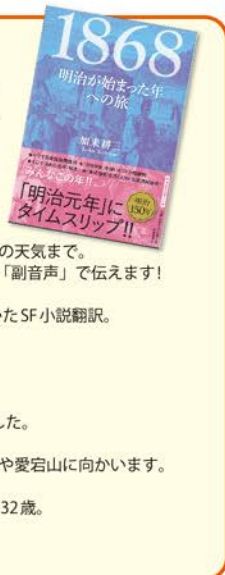
加来 斉彬は外様大名であり、春嶽はご家門。ともに国政参加権がなかったのです。それから

13年後のペリー来航で、やっと幕府の尻に火がつき、彼らの意見にも耳を傾けるようになるのです。まさに、失われた13年ですね。危機感を持ちながら行動に移せない、即時の対応ができない。歴史は繰り返すと言いますが、これは現代の日本人にも、そのまま当てはまりますね。

維新を最短距離で駆け抜けた 西郷隆盛

――明治維新を語るときに欠かせない人物、西郷隆盛の理念は何だったのでしょうか？

加来 維新を語る最近の風潮に、薩長両藩による暴力的な手法が、やがて世界大戦への参戦につながり、日本は敗戦を迎えることになった、



『1868 明治が始まった年への旅』 (時事通信出版局)

定価：本体1,400円(税別)

明治150年。
慶応4年＝明治元年にタイムスリップ！
戦争、政治、暮らし、流行…。そして毎日の天気まで。
すべてを再現し、毎月1章。本文と下段の「副音声」で伝えます！

パリで日本語新聞発刊。「200年後」を描いたSF小説翻訳。
くじで決めた元号「明治」。
「東武皇帝」を戴く幻の「北部連邦政府」。
みんなこの年！！

1月1日。江戸は穏やかな晴天に恵まれました。
江戸城に主はいません。不況とインフレ。
それでも人々は初日の出を見るために高輪や愛宕山に向かいます。
激動の一年が始まりました。
明治天皇17歳、西郷隆盛42歳、徳川慶喜32歳。
そして多くの市民たち。
さあ！1868年への旅へ！

という論調があります。これは結果論ですね。当時の状況に立ち止まっていたの、検証がありません。鳥羽・伏見の戦い以降の薩長主導のやり方が、すべて正しかったわけではありません。ただし、ベストではなかったけれどもベターではありました。少なくとも、欧米列強の植民地にはなりません。そうしたなかで、西郷隆盛という人物は維新という改革の積み重ねを、最短距離で走ったのです。その背景には、二度目の島流しで死にかかった経験がある。徳之島につづく、沖永良部島での生活は、わずか二坪の雨風吹き込む小屋に蓆を敷いて座り、食事は麦飯と焼き塩と真水少々という悲惨なもの。見る見るうちにやせていった西郷は、堂々と死んでやろう、と開き直ったのですが、死生の境目で、西郷はついに、敬天愛人の思想を抱くことになりました。そこには私利私欲がない。名誉も地位もない。一日も早く日本という中央集権の国をつくり、列強の植民地化を防がなくてはならないという、強い思いで、彼は改革を最短距離で走ったのです。

――しかし、明治新政府では大久保利通らと対立して下野し、やがて西南戦争になり自決します。晩年の西郷の真意はどこにあったのでしょうか？

加来 明治10年（1877）に西南戦争が起き

るのですが、このころ西郷は国家運営について

「もうひとつのやり方がある」と言い残し、片腕の村田新八は「もう一度、西郷に政権を取らせた」と言っています。どういう方法論なのかは、ついに明らかになっていませんが、「道義立国」という考え方だけではなかったように思います。下野した西郷は旧鶴丸城内に私学校を設け、軍事、行政、農業、産業を教えました。その根本にあるのは、地方分権の考え方です。まずは県、地域を強くすることが、国家全体の繁栄につながるというもので、西郷の死後、その志は後進の前田正名まさなに引き継がれ、全国各地で殖産事業を実践しようとしました。その声明書『興業意見』（全30巻）も発表、地方の特産物を輸出しようと考えたのです。しかし、中央集権化を急ぐ当時の日本政府には、認められませんでした。私は今こそ、と考えています。

歴史には法則性がある。

このままでは降下、転落する

明治維新から何を学ぶのか。いま、日本人には改めて歴史を顧みて、将来を考えるこ

とが試されていると思います。

加来 過去は未来を映す鏡です。歴史には繰り返すという法則性があるから、学問として成り立っています。たとえば、40年周期説というのがあります。慶応元年（1865）に朝廷が初めて開国を認めました（「第一の開国」）が、そのきつちり40年後の明治38年（1905）に、日本は日露戦争に勝利し、国力はピークに達します。ところが、それから40年、日本は坂道を下り、昭和20年（1945）には敗戦を迎えました（「第二の開国」）。すべてを失った日本は、それから40年経った昭和60年（1986）、経済復興を成し遂げ、先進国入りするのですが、ここからまた、40年を下ることになります。もし、40年周期説が正しければ、日本はこのまま落下していき、西暦2025年あたりでようやく止まることとなります。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控え、日本はますます東京への一極集中化、地方の疲弊化が進んでいます。一方で、戦争が再び近づいてきているという危機感があります。

利政策で、株式市場はバブル化の様相を見せて

いますが、五輪が終われば財政破たん危機に直面する恐れがあります。最悪のモデルは昭和5年（1930）の昭和恐慌の再来です。小津安二郎の映画「大学は出たけれど」に象徴される就職難と深刻な不況の中、生きている意味を見失った人々が続出し、一家心中が過去最高となりました。財政破たんには前触れがあります。モラルの低下です。最近の日本企業の不正、不祥事のオンパレード、役所のデータねつ造などは嫌な予兆です。今こそ、過去の歴史を検証して今後を議論想定しないと、再び愚かな過ちを繰り返すことになりかねません。だからこそ、学校教育や社会教育の現場で歴史を正しく教えていくことが必要なのです。

明治維新の目的は欧米列強による植民地化を防ぐことでした。

加来 地方創生と言いがら、名ばかりの状況が続き、五輪に向けたインフラ整備や日銀の超低金



Profile

1958年、大阪市生まれ。歴史家・作家。奈良大学文学部史学科卒業。著作活動のほかに、テレビ・ラジオ番組の時代考証や監修を担当。「ザ・今夜はヒストリー」（TBS系）、「英雄たちの選択」（NHK BSプレミアム）など出演。全国各地での講演活動も精力的に行っている。著書には『幕末維新まさかの深層』（さくら舎）、『坂本龍馬の正体』（講談社+a文庫）、『西郷隆盛100の言葉』（潮新書）などがある。監修者として『日本武術・武道大事典』（勉誠出版）、『コミック版日本の歴史』シリーズ既刊63巻（ポプラ社）などを手掛けている。